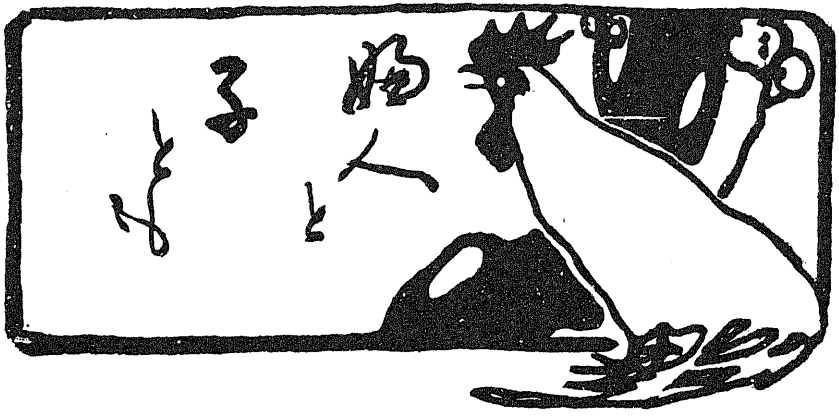

第拾卷第七號

久方の月の桂も折るばかり
家の風をも吹かせてしかな　（道眞）

あすよりは何をたのみに眺めまし
嵐に枯れし撫子の花　（樂翁）

子を思ふ道にまどひて今ぞ知る
ちゝぶの山の深き恵を　（小澤蘆庵）